

鳥取県米子市

INDADAIROKU

陰田第6遺跡・Ⅱ



0050277771

2002. 3

財団法人 米子市教育文化事業団



## 例 言

1. 本書は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国が計画した携帯・自動車電話無線基地局建設工事に伴い、平成13年度に米子市陰田町内で実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 陰田第6遺跡の調査回数については、複数の組織によって実施されているため、統一されていない。そのため本報告書では、平成8年度に当事業団が実施したものをⅠとし、本書をⅡとする。
4. 本報告書における方位は、第1図を除いて全て磁北を示す。またレベルは海拔標高を示す。
5. 本報告書第1図の地形図は、昭和63年10月修正米子境港都市計画図(米子市)を縮小して使用した。
6. 発掘調査によって作成された記録及び出土遺物は、米子市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査は、埋蔵文化財調査室調査員 佐伯純也が担当した。
8. 現地調査及び報告書作成には多くの方々のご指導、ご協力をいただいた。明記して感謝いたします。(敬称略) 石田爲成 伊藤実 稲垣寿彦 今西隆行 大川泰広 国田俊雄 下江健太 中原 斉 中森 祥 西尾克己 濱田竜彦 浜田真人 濱隆造 三辻利一
9. 本書の作成にあたっては、以下の報告書を参照した。  
1984年 「陰田」 米子市教育委員会  
1984年 「陰田第6遺跡(久幸地区)」 米子市教育委員会  
1996年 「陰田遺跡群」 鳥取県教育文化財団  
1997年 「陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3・4区」(財)米子市教育文化事業団  
1999年 「和田原D地点遺跡」 庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財センター

## 凡 例

1. 調査段階での遺構名は、略号を用い、検出した順番に割り当てた。なお、遺構名を変更しているものについては、遺構名の見出し右側に旧遺構名を記した。
2. 遺構図に用いたアミ線は被熱硬化面(FPと表記)を示す。
3. 本文、図、表、写真中の遺物番号は一致する。
4. 遺物番号は、土器・土製品にはPoを、石製品にはSを付けた。
5. 遺物実測図の縮尺は、土器は1/4、小形石製品は1/1、大形石製品は1/3、1/6である。
6. 遺物観察表は、単位は全てcmで、「※」印は残存値を、「△」印は復元値を示す。
7. 石製品の重量測定は、新光電子株式会社製DJ-3000を使用し、示した数値は、現状の測定値である。

# 1. 陰田第6遺跡の位置と環境

陰田第6遺跡は、米子市陰田町字久幸山一帯に所在する。現地は高根県との県境に近く、北部は口陰田地区と呼ばれる中海沿岸部に面する平野地帯と、南部の山塊から派生した狭小な谷地と平野部が混在する奥陰田地区に分かれる。今回の調査地は、1981年に調査された丘陵尾根部から北西に下った斜面にあたり、現況は梨を主体とする果樹林であった。現在は、国道9号線米子バイパスと国道180号線バイパスの交差点にあたり、開けた環境となっているが、本来は山に囲まれた谷地形をなしており、やや閉塞された環境に位置していたものと考えられる。

この遺跡は、これまでの調査で、弥生時代後期後半を中心とする集落と、奈良時代を中心とする集落が複合し、山頂部には、弥生時代、古墳時代の墳墓や横穴墓、近世の墓地が形成されるなど、遺構密度の高い遺跡であることが明らかとなっている。またこの遺跡の周辺では、陰田第7遺跡を始めとする、低地性の縄紋時代遺跡のほか、律令期における鉄生産遺跡の分布が密に見られることから、中海に至近の立地環境を生かした集落活動が行われていたものと考えられている。また弥生時代の様相については、不明な部分が多いものの、付近に所在する弥生時代遺跡の多くが、中期後半段階に集落規模を縮小させる傾向が指摘されていることから、これら遺跡群との動向についても注目される。

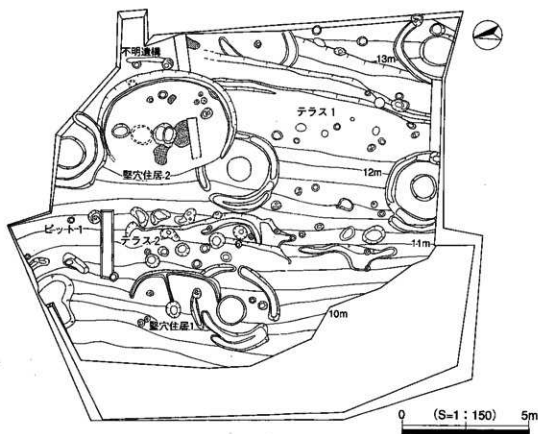


## 2. 調査の経過と方法

現地調査は、平成13年4月6日より着手し、5月7日に終了した。現地は傾斜地であり、排出された土砂の保管場所の都合から、4区画に分けて調査を行った。調査面積は200㎡である。現地調査は、重機にて梨畑の表土を掘削した後に人力により、包含層の調査、遺構検出作業を行った。現地調査終了後は直ちに整理作業を進め、平成13年度末までに、報告書の作成作業を行った。

## 3. 調査区内の堆積

調査地は西に傾斜した斜面に位置しており、近年まで梨畑として利用されていたため、地山面に至る深さまで耕作がなされていた。しかし部分的に20～30cmほどの厚さで暗褐色砂質土が堆積している地点が残っており、これが本来の遺物包含層と考えられた。この層からは、弥生土器や須恵器が出土した。また調査区内では、地山面にドーナツ状に掘り込まれた遺構を7基検出したが、これは戦後、梨木の植樹とその施肥をするために掘られた溝であり、深いものでは地表面から1.5mにも達していた。作られた時期が現代にかかるものであるため、詳細については省略したが、梨農家の苦勞が忍ばれる遺構である。



第2図・調査区平面図

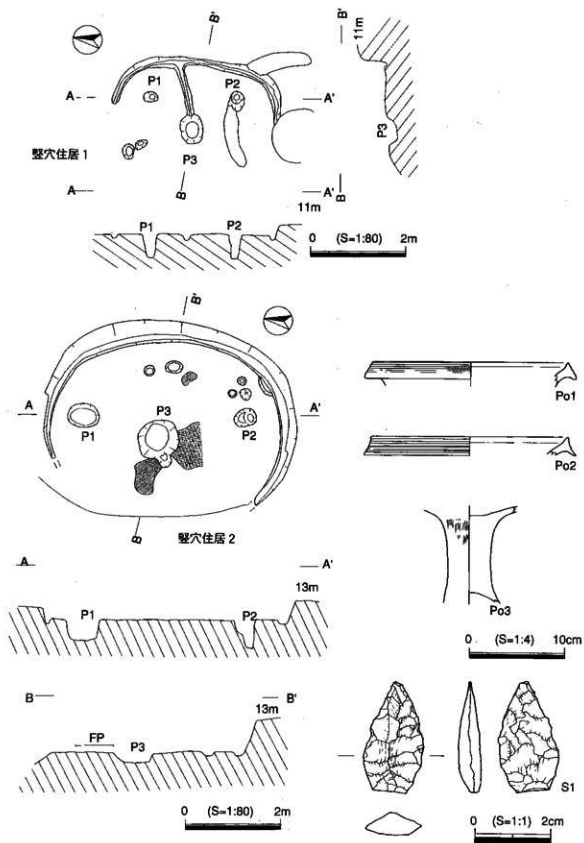
## 4. 弥生時代の調査

### 竪穴住居 1 (SI-01)

調査区北西部において検出した。住居の西側は、耕作など後世の改変により流出して原形を留めていないが、一辺が約3.5mの隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。掘り込み面から床面までの深さは、東側で50cm程度あり、床面は西側に向かって約2m程度残存している。なお床面には張床や被熱の痕跡は見られなかった。住居内の周囲には幅15cm、深さ10cmの断面「U」字形の溝が巡る。またその溝は、中央部のピットへとつながっている。中央のピットは、長径60cm、短径50cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。建物の柱穴は、二基検出しているが、西側に対応する柱穴を検出することが出来なかった。このため、建物の規模を復原することは出来ないものの、正方形4本柱の建物と推定すると、床面積は約12㎡程度と推定される。なお床面、埋土中からの遺物の出土はなかった。この住居跡の時期は、形態的な特徴から、弥生時代後期以降のものと考えられる。

### 竪穴住居 2 (SI-03)

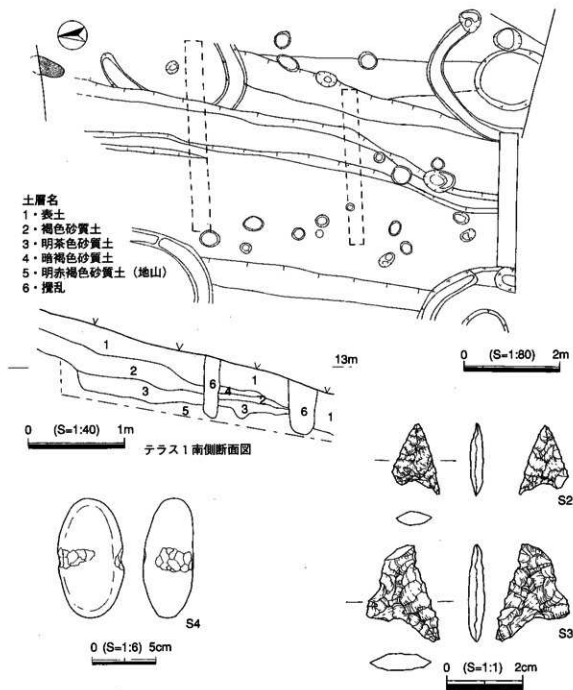
調査区北東部のテラス状遺構1の検出面と同じく検出した。検出した状況から、テラス状遺構1に先行するか、もしくは同時期に併存していたものと考えられる。形態は、長径約5.5m、短径4.5mの平面楕円形を呈する竪穴住居跡である。掘り込み面から床面までの深さは70cmを測り、周囲には深さ8cm程度の周溝が巡る。中央ピット付近の床面には赤く変色した範囲が広がっており、ここで火を焚いていたものと考えられる。また、この付近には炭化物の細片が分布しており、これに伴うものと考えられる。柱穴は2基検出し、北側に位置するP1は、長径70cm、短径55cmの楕円形で、深さは45cmである。南側に位置するP2は、長径50cm、短径35cmの楕円形で、深さは60cmである。この2本の柱間は、約3mである。中央に位置するP3は、直径80cmで、深さは25cmである。なお不明遺構1によって、一部攪乱されていた。出土遺物は、住居内の埋土中より、壺形土器の口縁部片を2点検出しており、どちらも中期末から後期初頭に相当する。またサヌカイト製の打製石鏃(S1)が出土している。これらの遺物は、住居床面から避難した埋土中からの出土である。その他に出土した遺物は、土器片が少量出土したに過ぎないため、おそらく建物の廃棄にあたって片付けがなされたものと思われる。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期初頭以降に埋没したものと考えられる。またこの住居の平面形態や、主柱が2本である特徴などは、周辺地域に類例が少なく、形態的にも特異なものである。県内では青木遺跡や大山北麓の遺跡に類例が見られるが、集落内での住居形式の主体となりうるものではない。他地域においては、広島県庄原市の和原D地点遺跡など、広島県内の遺跡に、こうした形態の住居跡の報告例が見られる。広島県内の資料と比較すると、柱間が開きすぎているようだが、後述するテラス状遺構1から出土している、堀町式の影響を受けた土器の存在などを考慮すると興味深い事例である。



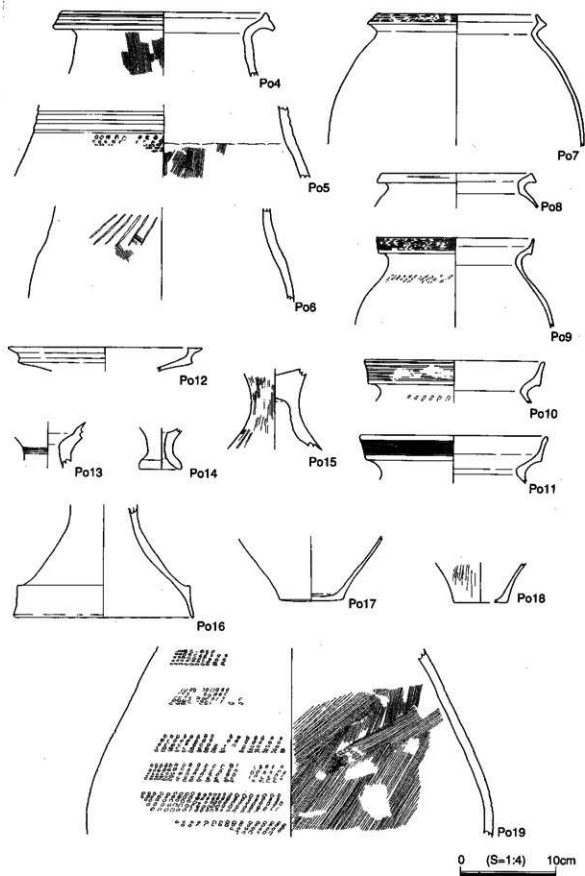
第3図・竪穴住居1、2および出土遺物

### テラス状遺構 1 (SX01)

2区から4区にかけて検出したテラス状の遺構である。検出した長さは約10m、幅は約4mである。ここからは複数のピットと溝状の遺構を検出した。このテラス状遺構の時期は、埋土中から、弥生時代中期後半から後期後葉の土器が出土しており、これらの時期に使われていたものと考えられる。出土遺物のうち、Po 19は、壺形土器の体部片で、外面に6条の刺突紋を巡らせている。こうした複数条の連続した刺突紋を有する土器は、備後北部系の「塩町式土器」の特徴に類似する。しかし胎土の特徴は、三次盆地の土器とは一致しないため、塩町式土器の影響を強く受けた土器と考えられる。

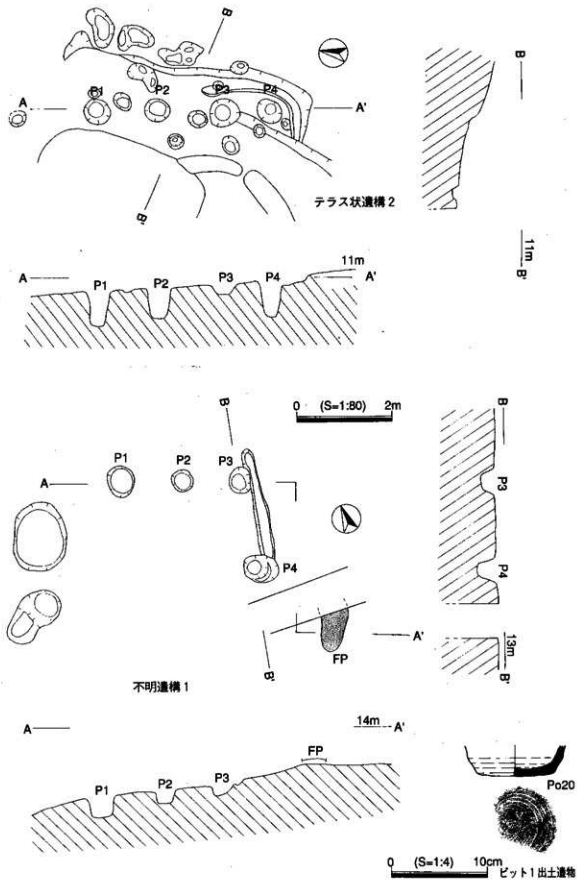


第4図・テラス1および出土遺物



第5図・テラス1出土遺物





第6図・テラス状遺構 2、不明遺構及びピット 1 出土遺物

## 5. 古墳時代から奈良時代の調査

### テラス状遺構 2

1区において検出した、幅5m、残存する奥行き1.5mを測るテラス状の遺構である。ピットが複数存在するが、西側が流出しており、柱穴としてのまとまりがつかめない。この遺構の形成時期は、ピットの埋土中から須恵器片が出土しており、古墳時代後期以降のものと考えられる。

### 不明遺構 1

テラス状遺構1検出中に、2区北端部にて、赤く変色した被熱面と溝、複数のピットを検出した。大半が調査区外に広がるものと考えられ、まとまりがつかめないが、住居跡の可能性が高いものと考えられる。時期は、上層の埋土より、完形の須恵器高坏(Po 4 8)が出土しており、これと同時期に埋没したものと考えられる。

### ピット 1

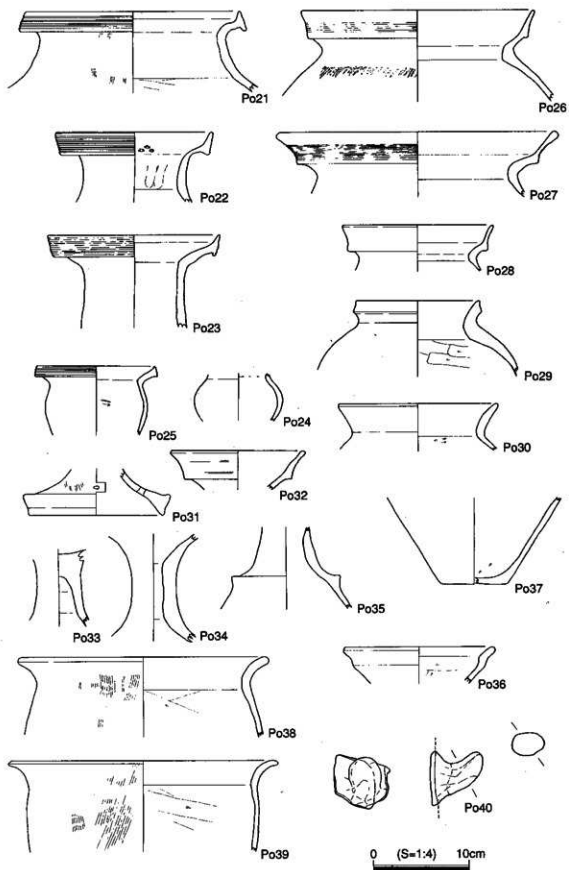
テラス2の北側の斜面部にて検出した。直径2.5cm、深さ1.5cmの円形ピットである。ピット内から須恵器坏身(Po 2 0)が出土した。何らかの理由で埋納したものと考えられる。時期は、8世紀後半と思われる。

## 6. 遺構外出土遺物

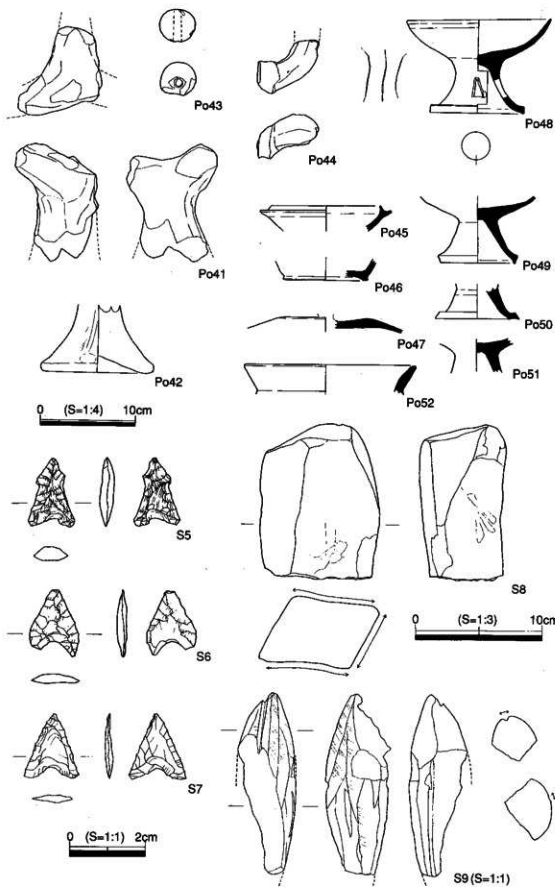
図示したものは全て表土掘削中に出土したものである。特記すべきものとして、九州型有溝石錘が出土している。鳥取県内では、安山岩を用いた有溝石錘の類例は、30点ほど出土例があるものの、今回の出土品では石材が異なっていることから、遠隔地から運ばれたものかもしれない。

## 7. まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡2棟とテラス状遺構2基、不明遺構1基、性格不明のピットを多数検出した。調査の成果としては、これまで知られていた尾根上の地点よりさらに下位の斜面に弥生時代の集落が広がることが明らかとなり、弥生時代の陰田第6遺跡の範囲がさらに広がることが判明した。また、出土した土器は、弥生時代中期後半段階から後期初頭段階のものがあり、集落の開始時期がここまで遡る可能性が高くなった。今回の調査は、面積的に小規模なものであったが、塩町式土器の影響を窺わせる土器が出土するなど他地域との関わりを示唆する資料を得ることができた。一方、平面楕円形2本柱住居については、山陰地方の在地的な住居形態なのか、あるいは他地域にそうした起源を求めることができるのか、新たな問題を投げかけるものとなった。今後、更に検討を重ねることで、こうした問題の解明に役立つものとする。



第7図・遺構外出土遺物①



第8図・遺構外出土遺物②

# 出土土器観察表

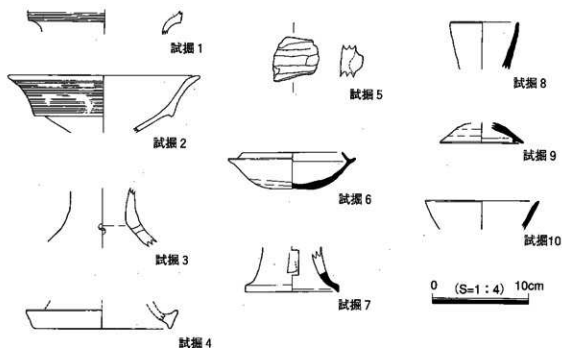
番号	種別	出土地点	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	3	壺穴住跡2	弥生土器	壺	※20.6	△2.6	1口縁部は「T」の字状に拡張し、3条の凹線が通る。	密	良	淡褐色	
Po2	3	壺穴住跡2	弥生土器	壺	※20.8	△1.9	口縁部は「ハ」の字状に拡張し、4条の凹線が通る。	密	良	淡褐色	
Po3	3	壺穴住跡2	弥生土器	高坏		△10.4	中央の高坏脚柱部外面ハク調整。	密	良	淡赤褐色	
Po4	5	テラス1	弥生土器	壺	※21.5	△6.7	口縁部は「T」の字状に拡張する。口縁の凹線は不明瞭、外面ハク、内面ケズリ調整。	密	良	淡褐色	
Po5	5	テラス1	弥生土器	壺		△7.7	頸部に刺突紋と3条の凹線が通る。内面ハク調整。	密	良	淡灰褐色	
Po6	5	テラス1	弥生土器	壺		△9.8	頸部に石がりの板状工具による刺突紋が通る。全体に風化著しい。	密	良	淡褐色	
Po7	5	テラス1	弥生土器	甕	※16.8	△14.0	体部はやや球形、口縁部は上方に拡張し、3条の凹線が通る。風化が著しい。	密	良	淡灰褐色	
Po8	5	テラス1	弥生土器	甕	※15.8	△3.7	頸部は内面下部を開かれ、強く凹曲し口縁は肥厚する。風化のため凹線は不明瞭。	密	良	淡褐色	
Po9	5	テラス1	弥生土器	甕	※16.5	△9.5	口縁は上方に拡張し、端部には腹凹線が、肩部には貝殻状工具による刺突紋が通る。	密	良	淡褐色	
Po10	5	テラス1	弥生土器	甕	※18.8	△4.5	1口縁は上方に大きく拡張、端部に凹線が、頸部には刺突紋が通る。内面直下より閉る。	密	良	橙褐色	
Po11	5	テラス1	弥生土器	甕	※19.6	△5.1	1口縁は上方に大きく拡張、端部に腹凹線が通る。内面直下より閉る。	密	良好	暗褐色	
Po12	5	テラス1	弥生土器	高坏	※20.4	△2.5	口縁は、段状に立ち上がり、外方に伸びる。端部に凹線の痕跡が残る。	密	良	淡褐色	
Po13	5	テラス1	弥生土器	高坏		△5.0	脚柱部に5条の凹線が通る。内面にしぼり痕が残る。	密	良	淡褐色	
Po14	5	テラス1	弥生土器	高坏		△4.4	小形の高坏脚部。風化著しい。	やや密	不良	暗褐色	
Po15	5	テラス1	弥生土器	高坏		△8.7	高坏脚柱部。柱部外面ハク、内面ナゲ、坏部内面ミガキ調整。	密	良好	橙褐色	
Po16	5	テラス1	弥生土器	器台		△12.0	器台側面。外内面とも風化著しい。	やや密	良	灰褐色	
Po17	5	テラス1	弥生土器	底部		△7.0	壺、もしくは甕の底部。内面は風化。	密	良	淡褐色	
Po18	5	テラス1	弥生土器	底部		△4.3	壺、もしくは甕の底部。外面はミガキ調整。	密	良好	褐色	
Po19	5	テラス1	弥生土器	壺		△18.5	体部に6条の刺突紋が通る。内面ハク調整。	密	良	灰褐色	
Po20	6	ビット1	須恵器	坏身		△3.3	内面は強くナゲす。底部未切。	緻密	堅緻	暗灰色	
Po21	7	遺構外	弥生土器	壺	※22.4	△8.6	口縁は「T」の字状に拡張し、端部に4条の凹線が通る。	密	良好	淡褐色	
Po22	7	遺構外	弥生土器	壺	16.3	△7.5	口縁は上方に拡張し、6条の凹線が通る。内面に竹箸紋あり。	密	良	淡褐色	
Po23	7	遺構外	弥生土器	壺	※18.0	△9.9	口縁は上方に拡張し、5条の凹線が通る。	密	良	淡褐色	
Po24	7	遺構外	土師器	壺		△5.1	小形丸底壺。全体に風化著しい。	密	良	暗褐色	
Po25	7	遺構外	弥生土器	甕	※12.4	△7.4	口縁部部に3条の凹線が通る。頸部内面直下までケズリ調整。	密	良	橙褐色	
Po26	7	遺構外	弥生土器	甕	※22.4	△9.8	1口縁部に凹線、肩部に貝殻による刺突紋が通る。全体に風化著しい。	密	良	灰褐色	
Po27	7	遺構外	弥生土器	甕	※29.0	△7.0	口縁は外方に拡張し、腹凹線が通る。	密	良	淡褐色	
Po28	7	遺構外	土師器	甕	※15.8	△5.0	口縁は外方に拡張する。全体に風化著しい。	密	良	淡褐色	
Po29	7	遺構外	土師器	甕	※13.0	△8.1	口縁は上方に短くつまみ上げる。内面ケズリ調整。	密	良	赤褐色	
Po30	7	遺構外	土師器	甕	※16.6	△5.1	内面ケズリ調整。全体に風化著しい。	密	良	淡褐色	
Po31	7	遺構外	弥生土器	高坏		△14.2	脚部は肥厚する。透かしあり。	密	良	淡褐色	
Po32	7	遺構外	土師器	器台	※13.7	△4.1	全体に風化著しい。	密	良	淡褐色	
Po33	7	遺構外	弥生土器	高坏		△8.2	内面ナゲ調整。外面風化。	密	良	橙褐色	
Po34	7	遺構外	弥生土器	器台		△11.5	全体に風化著しい。	密	良	橙褐色	
Po35	7	遺構外	土師器	器台		△8.8	全体に風化著しい。	密	良	褐色	
Po36	7	遺構外	弥生土器	鉢	※15.2	△3.9	外面ナゲ、内面ケズリ調整。	密	良	淡褐色	
Po37	7	遺構外	弥生土器	底部		△9.3	底部ケズリ調整。全体に風化著しい。	密	良好	橙褐色	
Po38	7	遺構外	土師器	甕	※24.6	△8.5	内面ケズリ、外面ハク調整。	密	良	淡褐色	
Po39	7	遺構外	土師器	甕	※17.8	△9.6	内面ケズリ、外面ハク調整。	密	良	暗褐色	
Po40	7	遺構外	土師器	甕		△5.8	風形土器、取手部。	密	良	灰褐色	
Po41	8	遺構外	土製品	支脚		△12.5	土製支脚、体部、形態は「Y」字形を呈す。	密	良	淡褐色	
Po42	8	遺構外	土製品	支脚		△7.2	土製支脚、脚部、底部内面はやや窪む。	密	良	橙褐色	
Po43	8	遺構外	土製品	土鏃	3.8	3.5	球形の土玉。	やや密	良好	暗褐色	
Po44	8	遺構外	弥生土器	水差			水差形土器の取手部。	密	良	淡褐色	
Po45	8	遺構外	須恵器	坏身	※11.6	△2.7	内外面ともナゲ調整。	緻密	堅緻	青灰色	
Po46	8	遺構外	須恵器	坏身		△8.8	底部内面静止ナゲ調整。肩台部は付。	緻密	堅緻	暗褐色	
Po47	8	遺構外	須恵器	坏身		△1.5	内面中央部は静止ナゲ調整。	緻密	堅緻	暗褐色	
Po48	8	遺構外	須恵器	高坏	15.1	10.1	脚部の透かしは「罎」所のみ。側面にヘラ痕あり。	緻密	堅緻	暗褐色	
Po49	8	遺構外	須恵器	高坏		△7.2	坏部内面は静止ナゲ調整。	緻密	堅緻	赤褐色	
Po50	8	遺構外	須恵器	高坏		△3.7	内外面ともナゲ調整。	密	堅緻	淡灰色	
Po51	8	遺構外	須恵器	高坏		△3.5	脚部に透かしの痕跡あり。	密	堅緻	灰色	
Po52	8	遺構外	須恵器	壺	※19.0	△5.2	内外面ともナゲ調整。	緻密	堅緻	暗灰色	

## 石製品観察表

番号	挿図	出土地点	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
S 1	3	竪穴住居跡2	石鎌	サヌカイト	※3.0cm	1.7cm	0.6cm	2.2	
S 2	4	テラス1	石鎌	黒曜石	2.6cm	2.0cm	0.4cm	1.6	
S 3	4	テラス1	石鎌	黒曜石	1.9cm	1.2cm	0.4cm	0.5	
S 4	4	テラス1	石錘	安山岩	18.7cm	10.3cm	7.8cm	1811.7	
S 5	8	遺構外	石鎌	黒曜石	1.8cm	1.2cm	0.4cm	0.5	
S 6	8	遺構外	石鎌	サヌカイト	1.8cm	1.3cm	0.3cm	0.4	
S 7	8	遺構外	石鎌	サヌカイト	1.7cm	1.5cm	0.2cm	0.5	
S 8	8	遺構外	砥石	流紋岩	※12.4cm	9.5cm	6.7cm	957.1	
S 9	8	遺構外	石錘	粘板岩	※4.8cm	2.7cm		8.8	

## 付載・試掘調査出土遺物

米子市教育委員会によって実施された、試掘調査出土遺物について概要を述べる。試掘調査では、2つのトレンチから弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土している。本調査で出土した遺物と同じ内容のものであるが、この中に、一点のみ円筒埴輪片が含まれている。タガは、断面が緩い台形で、貼り付けた痕跡を留める。胎土は橙褐色を呈し、やや軟質である。尾根上に位置する全長2.2mの前方後円墳、陰田4.3号墳からの転落遺物と見られる。



第9図 試掘調査出土遺物



1. 竪穴住居跡1 検出 (南より)



5. 竪穴住居跡2 完掘 (西より)



2. 竪穴住居跡1 完掘 (北より)



6. 竪穴住居跡2 完掘 (南より)



3. 竪穴住居跡1 中央ビット (西より)



7. 竪穴住居跡2 南側柱穴 (南より)



4. 竪穴住居跡2 検出 (北より)



8. 竪穴住居跡2 中央ビット (西より)



1. テラス1 検出 (北より)



5. 不明遺構1 完掘 (北より)



2. テラス1 完掘 (南より)



6. 焼土跡検出 (南より)



3. 1区テラス2 完掘 (北より)



7. 調査前風景 (南より)



4. 不明遺構1 検出 (北より)



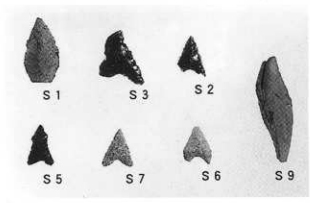
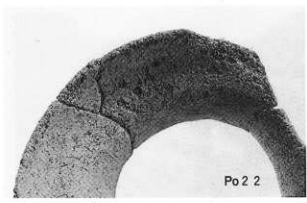
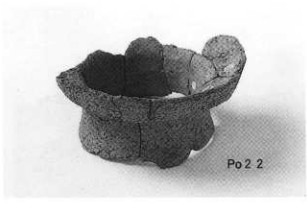
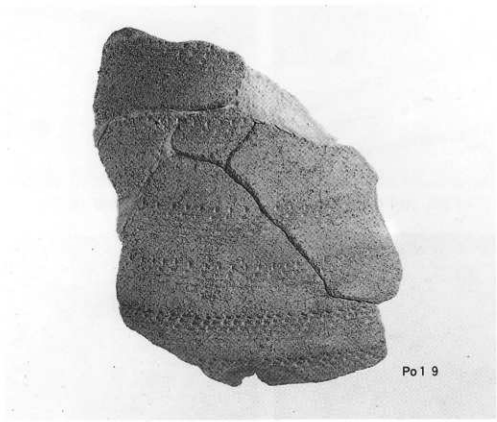
8. 調査地より中海 (北) を望む



210.2  
Yon  
(38)

図書館

写真図版  
3



## 報告書抄録

ふりがな	いんだだいろくいせき・Ⅱ							
書名	陰田第6遺跡・Ⅱ							
副書名								
巻次	38							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	佐伯純也							
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0822 鳥取県米子市中町20 (0859)22-7209							
発行年月日	2002年3月31日							
所在遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
陰田第6遺跡	鳥取県米子市 陰田町	31202	367	35度 24分 22秒	133度 19分 43秒	20010406 { 20010507	200m <sup>2</sup>	無線基地 局建設
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
陰田第6遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居 跡テラス 状遺構 ほか	弥生土器 土師器 須恵器 石器				

2  
Y  
②